Journal of Culture and Information Science, 8（1）, 12-20,（October 2012）

資料紹介

文化情報学部所蔵　マサオ・ミヨシ文庫について（2）

－国民国家とエグザイル、知識人の役割などについて－

田口　哲也・桐村　優希

前回ではマサオ・ミヨシ文庫が文献室に入った事情とマサオ・ミヨシの業績全般について記述したが、今回はミヨシ文庫の中核をなす国民国家とエグザイルの問題、知識人の役割や責任などに関連した紹介に加え、2011 年秋にカリフォルニア大学サンディエゴ校で開催されたミヨシ・トリビュートのシンポジウムについても簡単に触れた。

1. はじめに

前回（「文化情報学」第 6 巻第 1 号）、フレドリック・ジェイムソンの次の文章を引用した。

> 新しい歴史的な状況は、新しい用語とは言わないまでも、少なくとも古い用語の再検討＝再概念化を必要とするが、これはマサオ・ミヨシの仕事とその受容のされかたの中に最も明確に現れている。2 つの古いパラダイムが私たちと向き合っていて（そしてこの 2 つのパラダイム同士が向き合っているのだが）、それはすなわち、知識人とその専門化という問題と、国家とエグザイルの問題である。

知識人の専門化とは、極端に研究範囲を狭め、手っ取り早く業績をあげてテニュア・トラックに乗ろうとするアカデミアが生み出す、古くて新しい問題であるが、ミヨシはこのような傾向を憂慮し、あたかもアントニオ・グラムシが現代に蘇ったかのように激烈な批判を継続した。このような一切妥協のないミヨシの態度は国民国家とエグザイルの問題を扱うときも鮮明に現れる。それは第 2 次世界大戦でのみじめな知識人やアカデミアの敗北を繰り返さないという学者としての矜持と覚悟の表明でもあった。

今回はこのテーマを扱うミヨシが依拠した書物の紹介を中心に行っていきたい。

2. 大英帝国的表現としてのヴィクトリア朝英文学

ミヨシが収集し、残していった大量の書物の中には英文学関係のもの、とりわけヴィクトリア朝文学の書物が相当数ある。「ニューヨーク大学において英文学で博士号取得。1963 年博士論文作成中にカリフォルニア大学バークレー校に英文学の助教授として迎えられ、ヴィクトリア朝英文学を教える。その後、教授に」という略歴から分かるように、ミヨシはアメリカに帰化した英文学の教授で、専門は、英文学（ビクトリア朝文学）、であったのだから当然といえば当然である。これらの中には廉価版の文学作品シリーズやペーパーバックの文学作品がそれこそ山のようにある。これらの書物そのものはミヨシの後半生の業績、即ち、グローバル化の問題、ポスト＝コロニアリズム、企業化する大学、環境、あるいはジャパノロジーといった分野での刺激的な発言とは直接関係しないという理由から、また、これらの書物の大部分は現在入手がそれほど難しくはないものや、あるいは図書館等でも利用が可能であることから、あえてミヨシ文庫には含めていない。

2009 年にジョン・ソルト博士のご厚意によって南カリフォルニアのミヨシ邸を訪れた際に、こ

れらの英文学関係の書物は、ミヨシが仕事場としていた書斎の本棚にはほとんど並べられておらず、別置されていた。とりわけカリフォルニア大学サンディエゴ校に移ってからのミヨシの学問上の展開を見れば、これらヴィクトリア朝の文学作品が書斎のメインの位置から遠ざけられていくのは理解できるが、ミヨシがこれらの書物を完全に「処分」しようとした形跡はない。なぜであろうか。

ヴィクトリア朝の英文学を文芸学的に捉えた場合、同時期のフランスやドイツの文学にはかなり劣る。ごくごく僅かな例示にとどめるが、スタンダールやバルザック、あるいはボードレールやランボーを擁した19世紀のフランス文学や、ゲーテ、シラー、ホフマンスタール、ヘルダーリンなどを擁するドイツ文学と比べると、ディケンズやサッカレー、ジョージ・エリオットなどの英文学はかなり文学表現としては異質である。

デューク大学出版局から出た、死後出版の論文集、*Trespasses* に含まれているインタヴューの中でミヨシは英国発の「ノベル」と日本の小説を比較し、日本の口承的な要素が強く残存する小説に比して、英国のノベルの非口承性、即ち、印刷媒体として広大な大英帝国中に流通可能な小説の表現媒体としての特質を指摘している。ミヨシは帝国的表現としてヴィクトリア朝文学をとらえていたのである。

3. 国民国家とエグザイル

この問題に関する理論書は広範囲に収集されているが、量的にも質的にも目立つのはエドワード・サイードである。サイードは、最近ではアウンサンスーチーも講演した、BBCが誇る権威あるリースレクチャーを務めたほどの人物で、ほぼ独力でパレスチナの歴史を英仏から奪還した優秀な学者であるが、現代思想やポスト＝コロニアリズムに疎い層からはいまだに冷淡に扱われている。とりわけ日本の知識人の認識不足は深刻で、かつて東京駅の近辺にある有名な洋書店で目撃したペンギン版の『オリエンタリズム』にはわざわざ売り出し用の帯が掛けてあったのだが、キャッチフレーズとともにそこに記されてあった著者名の日本語表記はなんと「エドワード・セッド」（下線は著者）であった。確かに中学で学ぶ一般動詞“to say”の過去形、過去分詞形はそれぞれ“said”（発音は「セッド」）となり、その記憶が強かったのであろうが、日本の高度経済成長を支えた大量の安価な石油を買い付けていた中東では「サイード」という苗字は日本の「ヤマダ」「ヤマモト」「サトー」「サイトー」と同じように極めてポピュラーな姓であることを、私も含めて多くの日本人は知らなかったのである。

サイードが亡くなったときに彼を惜しむ多くの学者、批評家、活動家の追悼文を集めたサイトを今は亡き批評家の鈴城雅文が教えてくれた。その中にはコロンビア大学の大学院でサイードの「弟子」となった四方田犬彦の興味深い追悼文があったが、鈴城の短い追悼文はサイードの矛盾した存在を見事に言い当てていた。即ち、「エドワード・サイードという名前そのものに彼が抱えていた矛盾、否、ポスト＝コロニアリズムの現代を生きる多くの人々が抱えている矛盾が集約されている」といった内容のものである。

いうまでもなく、「エドワード」とはサイードが育ったパレスチナの旧宗主国である大英帝国の核、アングロ＝サクソン系の中では日本の「タロー」や「ジロー」のような最も一般的な名前であり、サイードはこのアングロ＝サクソン系の名と、土着のパレスチナの姓を併せ持つハイブリッド（＝複合体）なのだ。このような名前は学術的には流通していないが、彼はいわば英国化されたスコットランド人のことをアングロ＝スコッティッシュと呼ぶように、アングロ＝パレスチニアンであったのだ。

このようなサイードをめぐる、従来の国民国家の枠内ではおよそ解釈のできない状況とジェイムソンの言うエグザイルの問題は、ミヨシが切り開こうとした問題とそれぞれ個別の状況の違いはあるにせよ、両者の結び付きを強めることはあっても、弱めることは決してなかった。だからこそ、前回でも紹介したように、サイードからミヨシに贈られた自著には「闘う同志」という献辞があったのだ。ミヨシ文庫には献辞や署名入りの多くのサイードの著書や、サイードが切り開いたオリエンタリズム関係の書物や、ポスト＝コロニアル関係の理論書が数多く収められている。今回のリストに抽出したものは最も代表的な著述に限定したが、ミヨシがポスト＝コロニアリズムの言説を固めていく過程で準備した著作を見るのも興味深い。マルクス主義関係ではレーニンや毛沢東やローザ・ルクセンブルクの英訳、文化理論の革新的な研究としていまだに強い影響力を誇るルド

ヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン、ハーバート・マルクーゼ、フランツ・ファノンなどの現在は入手が難しい著作も充実している。

4. 知識人の責任

次にジェイムソンが指摘したミヨシのもう一つの重要な貢献として挙げていた、知識人の役割やその責任に関する問題に移ろう。ミヨシはサイードのようにアングロ化したファースト・ネームは持たなかったが、ミヨシ・マサオではなく、マサオ・ミヨシという語順とカタカナ表記に端的に現れているように、アメリカ人となった上、アメリカの知識人にも多大な影響を与えた。

ミヨシが点火した松明は現在もサンディエゴを中心に北米大陸で輝き続けているのを実感したのは 2011 年にカリフォルニア大学サンディエゴ校で開催されたミヨシへのトリビュートのシンポジウムであった。主催者は日本風に言うなら人文科学研究所にあたる人文学センターのディレクター（所長）であるステファン・タナカで、多くの先鋭的な学者が北米中から集まった。詳細は付録 1、2、3 を参照していただきたいが、参加者は何らかの形でミヨシから強烈な刺激を受けた研究者である。それぞれの仕事を細かく紹介はしないが、例えば、シカゴ大学のブルース・カミングズの浩瀚な朝鮮戦争についての著述である『朝鮮戦争の起源』は全 2 巻（第 2 巻は上下二分冊）で日本語に翻訳されている。このイベントはすべてビデオに記録され、編集・整理されて DVD に収められた。また、ユーチューブでもアップされているので発表者の名前をユーチューブ上で入力すれば詳しい発言内容を視聴することが可能である。この作業を行ったのは前述のステファン・タナカ教授であり、同教授からの 2012 年 3 月 20 日付の書簡によれば、Taguchi の発表に触発されて、ディジタル時代の人文学の研究の将来に資するようにと、Gay Lester さんからセンターに寄付があったとのことである。

ミヨシは米国を本拠地として活動を行った関係で、当然ではあるが発信は例外なく英語で行われた。したがって収集された多くの書物は英語文献が中心であったが、ミヨシはアメリカにおけるジャパノロジー、とりわけ近現代の日本文学研究の大家でもあったので、日本語の書籍も英語文献に比べるとそれほど多くはないが含まれている。研究上の必要に迫られて収集したものもあるが、長文の献辞を付した大江健三郎などからの貴重な寄贈本もある。後者に関しては前回の記事でも紹介したように、ミヨシ文庫とは別個に現在も整理中である。これらの貴重本とは別に、ミヨシ文庫に含まれている日本語の書物で目立つのはノーム･チョムスキーの翻訳や柄谷行人の著書である。柄谷は現在英語で発信できる日本最高の思想家のひとりであり、チョムスキーは言語学の世界ではもちろん、政治学や思想界でも世界中の研究者や批評家に重大な影響を与えた知識人である。地道な学問研究に基づいたその分析には定評があり、また歯に絹を着せないシャープな発言には各国の主導的なメディアも常に注目している。ミヨシとチョムスキーを結ぶのはアメリカによるベトナムへの侵略戦争の際に彼らが全力をあげて質そうとした知識人の役割である。ミヨシ文庫に収められたチョムスキーとミヨシ自身の書物、そして彼ら二人を二つの中心として同心円のように広がる思想的抵抗及び、オールタナティヴな価値観の提示された世界が今回の限定されたリストを眺めていると見えてくる。イギリスの労働者階級の起源の研究で有名な E・P・トンプソンは 1970 年代の反核運動の旗手であったし、デイヴィッド・ハーヴェイやホミ・ババなど、恐ろしくシャープな思想家たちが次々に浮かび上がってくる。

最後に実際的に利用価値の高い書物として講談社インターナショナルから出た板坂元の編集による日本百科事典を上げておきたい。ミヨシ自身も項目執筆をしているこの英語による百科事典は日本文化を世界に発信する際に最も参考になる記事が多く集められており、私自身もよく利用するとても便利なレファレンスであり、これが文化情報学部の文献室に配架されたことを喜びたい。次回からはミヨシによるジャパノロジー研究の跡を探っていきたいと考えている。（以下次号）

付録 1
「ミヨシ・トリビュート 2011 at USCD」のプログラム

Trespassing: The Future of the Humanities

9:30 Welcome
Stefan Tanaka, Director, Center for the Humanities
Nina Zhiri, Chair, Department of Literature
Seth Lerer, Dean, Division of Arts and Humanities

10:00 The Trespasser

John Solt
Reflections on Masao Miyoshi's Amherst College Lectures— "Bashing: An Exercise in Cross-cultural Criticism" (1992) and "Japan Is Not Interesting" (1997)—as Models for Trespassing and Trampling

Don Wayne, University of California, San Diego
Inspiring Controversy across Disciplines

Rob Wilson, University of California, Santa Cruz
A Transpacific Trespasser in the Humanities

Bruce Cumings, University of Chicago
Off Center: In Praise of a Radical Displacement

Gerry Iguchi, University of Wisconsin, Lacrosse
Who Decides, Who Speaks?

Leo Ching, Duke University
(un)Interesting? post-Fukushima Japan

Takeo Hoshi, University of California, San Diego
Is Japan Interesting--is there an economic recovery?

12:30-1:30 lunch

2:00 Trespassing into?

Eric Cazden, University of Toronto
A Non-moralizing Critique

Rosaura Sanchez, University of California, San Diego
Implications of the Privatization of Education for Minorities

Jim Fujii, University of California, Irvine
From the Logic of Difference to Inclusive Totality: Trespasses of the Individual Being

George Solt, New York University
Afterlives of and After Area Studies

Mary Layoun, University of Wisconsin, Madison
To Relearn the Sense of the World

Tetsuya Taguchi, Doshisha University
Mathematical Sciences Conquers Humanities: The Future of Digital Education

Richard Dienst, Rutgers University
Planetarity as a Way of Life

Christena Turner, UCSD
Closing Remarks: Portals to our Future?

4:30-5:30 Reception

付録２

「ミヨシ・トリビュート 2011 at USCD」のポスター

UCSD

Trespassing: The Future of the Humanities, a tribute to Professor Emeritus Masao Miyoshi

Friday, October 28, 2011

9:30 am—4:30 pm

Seuss Room, Geisel Library

Masao Miyoshi was always challenging, always looking to the future. In the "Forward" to Trespasses, Fred Jameson summarizes Miyoshi well: "Radical art, the commercialization of the university, the nation-state, Japan and the West, cultural studies, subjectivity and pronouns, ecology, the state of things from Korea to the Mexican border, or from Cardinal Newman to documenta X—such are the seemingly heterogeneous materials united by a commitment to an implacable unification of the aesthetic and the political, of attention to art and attention to globalization, which Miyoshi's life-work holds out for us like an ideal." We face many challenges in the university (and the world) today. Friends, colleagues, and former students will convene at the Seuss Room at the UCSD Geisel Library to explore the many facets of this complex thinker and his deep commitment to always improving humanistic inquiry.

Miyoshi's career was that of always moving beyond his present. Born May 14, 1928, he graduated from the University of Tokyo, majoring in English, came to the United States, and earned advanced degrees at New York University. He was a prolific scholar whose work also demonstrates his penchant to move "off center." His major works include, The Divided Self: A Perspective on the Literature of the Victorians (1969), Accomplices of Silence: The Modern Japanese Novel (1975), As We Saw Them: The First Japanese Embassy to the United States (1860) (1979), Off Center : Power and Culture Relations Between Japan and the United States (1991), and "The University in 'Globalization': Culture, Economy, and Ecology" (2003). He also edited and co-edited many other books of essays on globalization, post-modernism, and the future of area studies.

Seth Lerer, Dean, Division of Arts & Humanities
Oumelbanine Zhiri, Chair, Department of Literature
Christena Turner, Director, Program in Japanese Studies
Stefan Tanaka, Director, Center for the Humanities

付録３
「ミヨシ・トリビュート 2011 at USCD」のポスターのテキスト

Friday, October 28, 2011
9:30 am—4:30 pm
Seuss Room, Geisel Library

Seth Lerer, Dean, Division of Arts & Humanities, Oumelbanine Zhiri, Chair, Department of Literature, Christena Turner, Director, Program in Japanese Studies,
Stefan Tanaka, Director, Center for the Humanities
UCSD

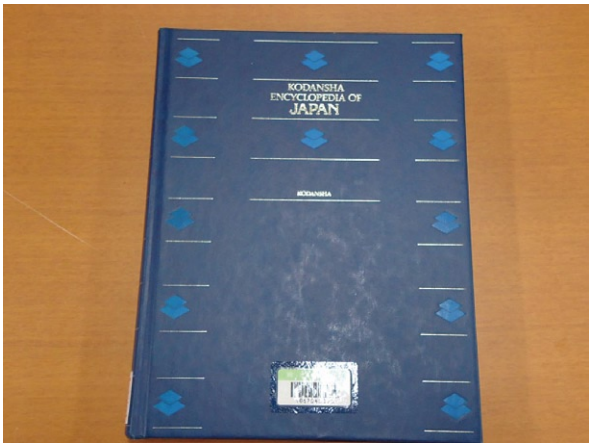
Trespassing: The Future of the Humanities, a tribute to Professor Emeritus Masao Miyoshi

Masao Miyoshi was always challenging, always looking to the future. In the "Forward" to *Trespasses*, Fred Jameson summarizes Miyoshi well: "Radical art, the commercialization of the university, the nation-state, Japan and the West, cultural studies, subjectivity and pronouns, ecology, the state of things from Korea to the Mexican border, or from Cardinal Newman to documenta X—such are the seemingly heterogeneous materials united by a commitment to an implacable unification of the aesthetic and the political, of attention to art and attention to globalization, which Miyoshi's life-work holds out for us like an ideal." We face many challenges in the university (and the world) today. Friends, colleagues, and former students will convene at the Seuss Room at the UCSD Geisel Library to explore the many facets of this complex thinker and his deep commitment to always improving humanistic inquiry. Miyoshi's career was that of always moving beyond his present. Born May 14, 1928, he graduated from the University of Tokyo, majoring in English, came to the United States, and earned advanced degrees at New York University. He was a prolific scholar whose work also demonstrates his penchant to move "off center." His major works include, *The Divided Self: A Perspective on the Literature of the Victorians* (1969), *Accomplices of Silence: The Modern Japanese Novel* (1975), *As We Saw Them: The First Japanese Embassy to the United States* (1860) (1979), *Off Center : Power and Culture Relations between Japan and the United States* (1991), and "The University in 'Globalization': Culture, Economy, and Ecology" (2003). He also edited and co-edited many other books of essays on globalization, post-modernism, and the future of area studies.

付録４　関連写真

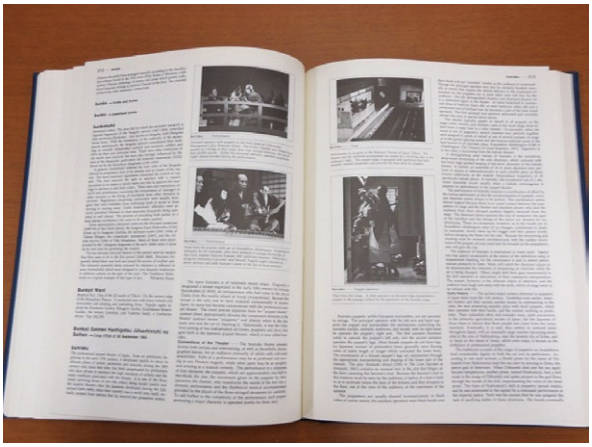
Masao Miyoshi Bunko @ the Faculty of Culture and Information Sciences Library, Doshisha University, Kyotanabe Campus, Kyoto, Japan

A Part of Masao Miyoshi Bunko (The sign on the top says “A Collection of Masao Miyoshi”

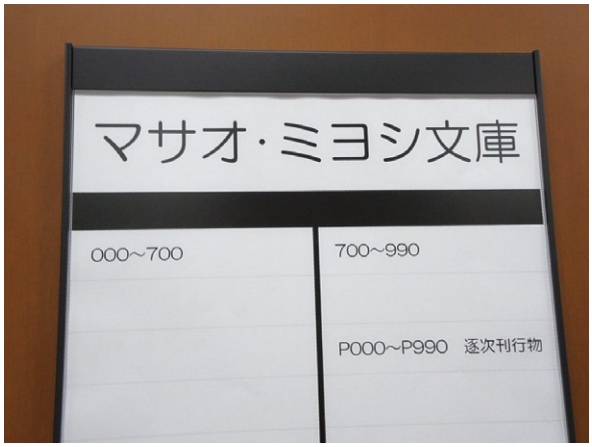


講談社の英語版『日本百科事典』（ミヨシは項目執筆も担当）

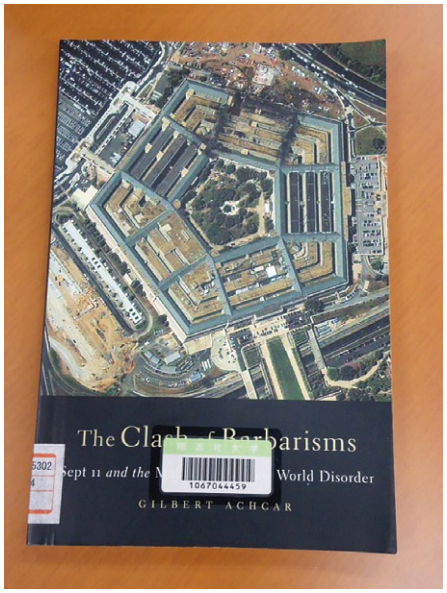
A Part of Masao Miyoshi Bunko（ミヨシ文庫の一部、英語版日本百科事典などが並ぶ）



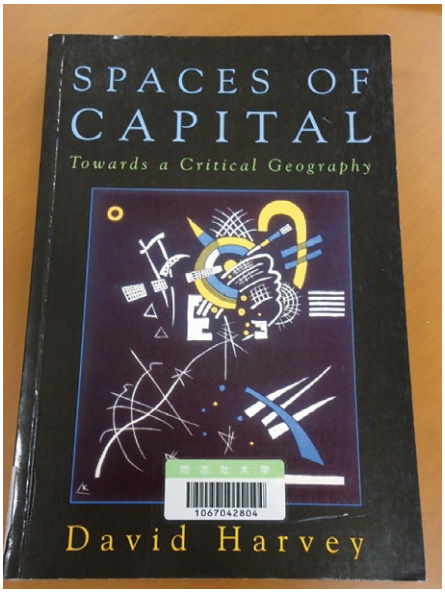
講談社の英語版『日本百科事典』（日本文化の海外への発信には便利な百科）



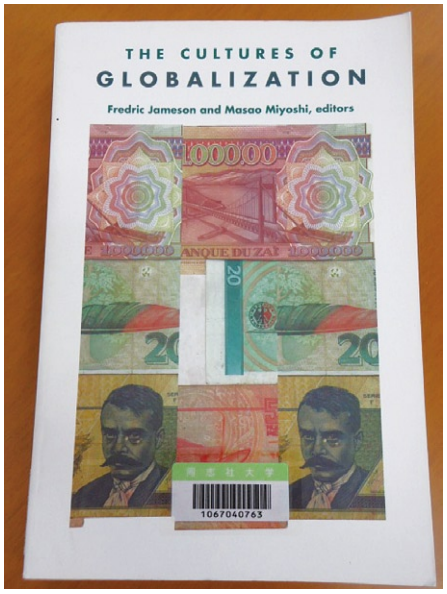
The sign says “Masao Miyoshi Bunko(=Collection)” in Japanese



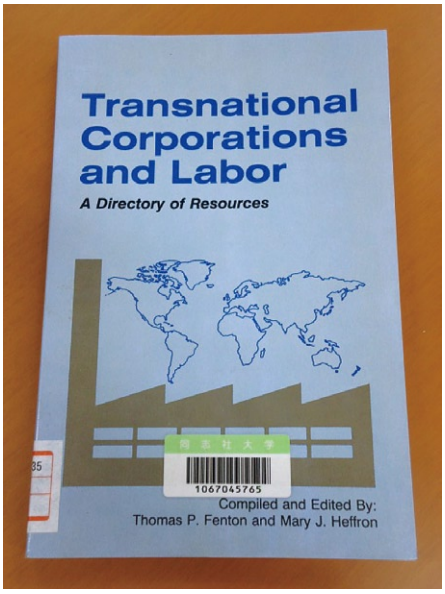
9・11 に関する文献（9・11 についてもミヨシやチョムスキーは積極的な発言を行った）



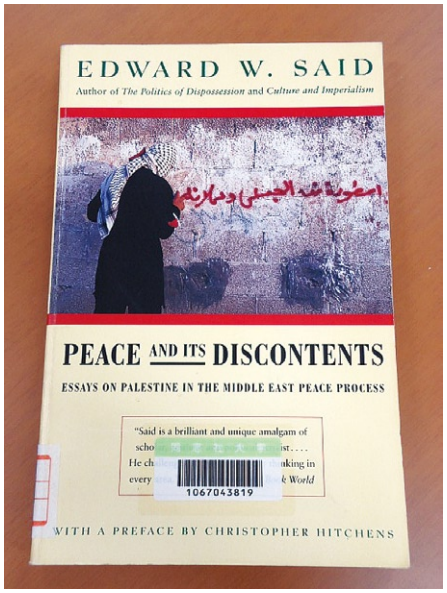
デイヴィッド・ハーヴェイ『資本の空間―批判的地理学にむけて』（ハーヴェイはミヨシの盟友）



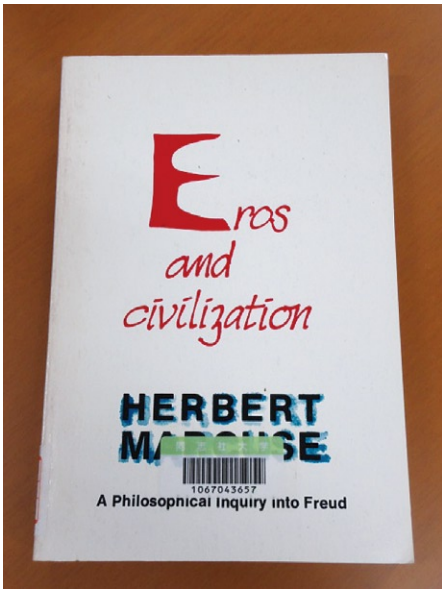
ジェイムソンとミヨシの編集によるグローバル文化に関する論文集



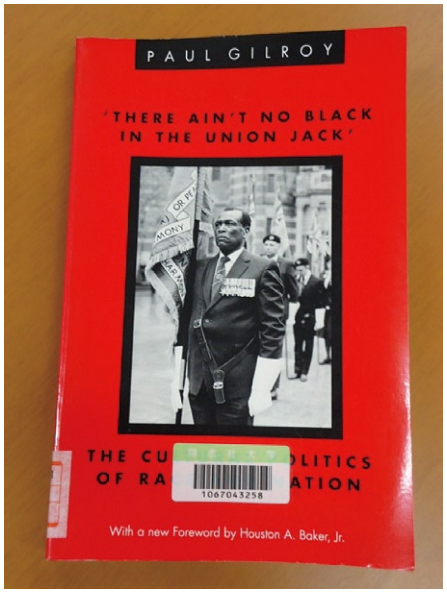
多国籍企業と労働に関する研究書のひとつ



エドワード・サイードによるパレスチナ問題に関する書物のひとつ



ハーバート・マルクーゼ『エロスと文明』



ポール・ギルロイ『ユニオン・ジャックには黒がない』（人種関係論）